

◆【海員随想】二つの救命胴衣⑤ 石橋 正

12時間に及ぶエンジンの酷使――「機関長、自力座礁する。全員を上を上げてくれ」私は船長室に戻り、下着も靴下もすべて新しいものに替え、制服を着て隣の研究員室の技官に「何か浮いているものにつかまって何とか逃げてください」と感謝の言葉と共に上げた

初めて本船の調査員として乗船したM技官の顔が異様にひきつった。唇も指先も震えているのが分かった。本当に気の毒であった。私は無意識に自分の着けていた救命胴衣を外し、「これを着けなさい。2つ持った方がいくらか安全だから」といった。

「ワッ!」と言葉にならない声を出して、M技官はその救命胴衣にしがみついた。何か、少しだけ良いことをしてやれたような、すっきりとした気持ちであった。(彼はその後「私の船に研究員で乗るなら死んだ方がいい」と、二度と乗船してくることはなかった)

ブリッジに集まった乗組員の着けている救命胴衣は旧海軍の航空隊用のものだったので、ブリッジ内は戦闘配置のように息づまる様相になってきた。重要書類はまとめて一等航海士に背負わせた。狭いブリッジの中は救命胴衣を着けた乗組員でいっぱいであった。誰も口を開く者はなかった。私は操舵手の手から舵輪を取り、一気に風下の海岸に向けるべく反転した。

猛烈な追い風を受けて矢のように海岸に向かって突き進む船。乗組員たちは不安そうな顔をさらに一層うつ向けて全員座ってしまった。操輪を握りしめて一人ひとりの顔をながめていると、一番隅の方でじっと私を見上げている少年に気がついた。それは、この航海に初めて乗船してきた中学を出たばかりのボーイであった。

「こいつにも気の毒なことをしたな」と思ったが、よく見ると彼は救命胴衣を2つ体に巻きつけていた。

希望に燃えてこの船に乗ってきたのに、大波にもまれ叩かれ、挙げ句の果てに自力座礁をする。「岸にぶち当たったら、みんな飛び出して逃げろ」という乱暴な船長の指示が出たのである。慣れた船員でさえ、みんな押し黙っているのだから、少年の彼が怖がるのは当たり前だ。そして、上目づかいに私を見上げている彼の抱いているもう1つの救命胴衣は、誰がやったものだろうかと思った。

「海員だより」